

唐丹希望基金「あの日 あの時」

[3] 支援期間を 1 年から 9 年に延長した時の事

唐丹希望基金代表 高館 千枝子



津波で全壊した旧・唐丹小学校(2011年4月25日撮影)

2011年4月、私は「東日本大震災教育支援プロジェクト」を、一年計画で立ち上げました。震災直後の新聞、テレビのニュースは毎日、毎日“東日本大震災一色”で、同じ県民として何かしなければ、私に何ができるのだろうか？と問い続けていました。ニュースを見ながら「被災者に直接届くお金が必要なのでは？」と考えたとたんに、自然に頭と手が動き出し、仕事が次々浮かび、取材依頼の起案書を書き始めていました。同情しながらテレビを見ているだけの傍観者にだけはなりたくない、「一刻も早く、お金を届けなければ！」の一心で、一人で募金を始める不安や、募金が集まらない時の事など考えられずこれだけを考えていました。夜中に、報道機関にファックスで知らせると、翌日には取材を受け、即、記事になって報道され、手紙を出す作業にさえも充実感を感じ、募金の為に頭と手を動かしている事が、何よりの心の安定剤になりました。

2011年12月13日、“唐丹サンタルチア祭”が終わり解散の挨拶で、堀 泰雄さんから重要な提案が出されました。「震災から、もうすぐ、一年が過ぎようとしています、瓦礫が少し減っただ

けで、見ての通り何も変わっていません。今までは支援する人も沢山いましたが、これからが大変なのではないでしょうか？支援する人もいなくなるだろうし、訪問する人も減っていくと思います。もうしばらく、支援を続けませんか？」と。皆さんも、被災地の様子を見ていたので、同じ思いだと思いました。私も、遠慮が先立って、自分から言い出す事は出来ませませんでした。遅々として復興が進まない中、一年でプロジェクトを閉じる気持ちになれず、支援を続けるための、何か良い方法はないものかと考えていましたから、堀さんの提案に喜んで賛成しました。続いて、堀さんはこうも言いました。「私を副代表として働かせてください。そうすると責任も大きくなってきますが、何か、役に立てると思います」と。もちろん、異論などあるはずもなく全員大賛成！こうして、二年目から堀泰雄さんに副代表になっていただき、活動を継続することになりました。

団体名を「東日本大震災教育プロジェクト」から「唐丹希望基金」と改め、2012年、2013年と続けるうちに、心配していたことが現実になってきました。募金が徐々に減るようになり、支援を続けようにも、お金が集まらなければ、活動を止めざるを得ないが、いつまで続けられるだろうか…？と、不安の日々が続くようになりました。

“支援打ち切り”のタイミングを探り始めていた2013年4月30日、一枚の葉書が届きました。群馬県高崎市に住み、入学式、卒業式、唐丹サンタルチア祭には欠かさず参加し、復興の進捗状況を見ていた伊藤富美子さんからでした。春の挨拶の最後の一文に「あの年に入学した子供たちが中学を卒業するまで元気でいたいです」とありました。この一行が、私に「9年間の支援継続」を決断させてくれました。「支援者は、4人は必ずいる！あの年に入学した子供たちが義務教育を終えるまで支援できれば、安心して退く事ができる…」と気持ちが定まりました。この思いを、12月の“唐丹サンタルチア祭”前夜に予定している、支援者集会で発表する事にしました。活動の再スタートをホームページや手紙で知らせるのではなく、先ず、支援してくださる人と目を合わせて、自分の口で話すのが最も相応しいと考えたからです。

12月までの8ヶ月間は“今後、6年間の支援活動を全うする覚悟”を持つ時間になっていました。私は、教職を退職し山ほどある時間を「どう生き、人生を閉じていくか？」を模索し始めていたので、第三の人生の“真の生き方”（第一の人生は自分を育てる時代、第二の人生は仕事を通して社会貢献する時代、第三は職場引退後の人生）を探していたことに気が付きました。

多少の趣味も楽しみ、ボランティア団体に加入して奉仕活動もしていましたが、それは、一時的な自己満足にすぎず、心から納得する生き方とは違っていました。この頃、東日本大震災が起き、沿岸地区の学校全壊の映像を見て、被災地の義務教育の存続の危うさが心に刺さり、僅かでもその力になりたいと、心底、思いました。すべてを津波で流され、将来、復興に携わる子供を育てる親の助けにならなければ、と思ったのです。これを機に、所属していた全てのボランティア団体を脱会。計画していた旅行や長年続けて来た趣味の自粛など、ためらいもなく諦めることができました。これまで、人生の中で出会った尊敬する先輩方から学んだ“真の生き方を行動に移すのは今なのだ”と自覚しました。東日本大震災は、私にとってそれだけ衝撃的で、心に深い打撃を受けた出来事でした。

極めて異常な心理状態に陥り、強度の悲しみと辛さがのしかかった心の叫びを鎮静する為に始めた“唐丹希望基金”は、私の求める“真に生きる道”の入り口に立たせてくれました。



2013年12月12日、津波で全壊し3年がかりで開業したばかりの大槌町にある「ホテルはまぎく」を会場にして、当時の唐丹中学校長 佐藤和信さん、唐丹小学校長 西村文利さんも出席し、支援者21名が参加して集会を持ちました。唐丹希望基金の2020年3月までの継続を喜んだのは、子供たちの家庭状況をよく知っている両校の校長でした。校長から、学校生活や町内の復興状況を聞いたとき、私達の決断が正しか

った事を、心から喜び合いました。この時、またも、堀さんから重要な提案が出されました。

堀：「高館さん、2020年まで6年もあるのに、このまま、何もしなければ募金は徐々に減っていくのは目に見えていますが、何か、対策を考えていますか？」

高館：「自分の覚悟を持つのに精一杯で、そこまで考える余裕がありませんでした。

何か、いい方法があるでしょうか？」

堀：「先ず、宣伝しなければいけません。」

高館：「宣伝ですか？どのようにして宣伝したらいいのでしょうか？」

堀：「先ず、パンフレットを作って、これまでの支援者に配るのです。」

高館：「パンフレットですか？」

堀：「そうです。パンフレットは私が考えます。少なくとも5,000部は必要でしょう。それを全国の支援者に送って、新聞社にも知らせて支援者を増やさなくてははいけません。パンフレットが足りなくなったら、もう5,000部増刷するつもりで、とにかく宣伝しましょう！」

(次々、名案を言い出す堀さんに圧倒され、驚きながら聞き入るだけの私でした。)

パンフレット：「唐丹の子どもたちを支援する希望基金 2011-2020」

<http://eec-2020.com/daihyo/takadate/panf.pdf>

このようにして、全員が心から納得する方針が決まり、消えかけた唐丹希望基金に勢いが増し、お互いの基金に関わるようになった動機や子供たちを応援する決意などを聞き合っている内に、復興が進まない苛立ちや被災地で暮らす人々の痛みが、心に響いてきて、支援への団結力が高まったのです。この時の参加者は、現在も子供たちを見守っています。



翌日、13日は“唐丹サンタルチア祭”で学校訪問。ホテルのバスで被災地（大槌町旧庁舎、釜石市鶴住居、唐丹町津波石碑など）を巡りながら、11時頃に学校に着いて、直ぐ、授業参観でした。教室への出入り自由、生徒に声をかけ一緒に写真を撮ることも許され、どの教室からも笑い声が聞こえました。こんな和やかな雰囲気は初めての事だったので、子供たちも、私たち

も先生達も、とても、幸せでした。きっと、朝のうちに唐丹希望基金の方針が知らされていたのでしょう。昼食は学校給食を、児童会・生徒会代表の子供たちと一緒に食べました。2013年12月13日は、唐丹小・中学校と唐丹希望基金の“信頼と友情の誕生記念日”になっています。